

日科技連 主催
ソフトウェア品質シンポジウム2013委員会 特別企画
「投稿応援フォーラム：社外発表のススメ」

SQiP2012での私の発表体験 ～ 社外発表のススメ ～

2013.3.15

ソニー株式会社 花原 雪州
(Sessyu.Hanahara@jp.sony.com)

SQiP2012：ソフトウェア品質シンポジウム2012

品質技術者は、社外発表を経験しなくちゃもったいない!!

本日のご説明の概要

なぜ社外発表したのか？

なぜ社内発表では不足なのか？

社外発表までにどんな壁を乗り越えたのか？

SQiP2012の後にどんな明日が待っていたのか？

自己紹介

- 花原 雪州 Sessyu.Hanahara@jp.sony.com
- 現職：
 - ソニー(株) デバイスソリューション事業本部 品質信頼性部門
 - 社内活動：
 - ◆ ソフトウェア/ハードウェア開発PJに対するプロセス改善活動（PMP）
 - ◆ 「KWS振り返り」を用いたプロジェクト/組織改善活動
 - 社外活動：
 - ◆ 日科技連 SQiP研究会2011, 2012にて「KWS振り返り」の研究
 - <http://www.juse.or.jp/software/394/attachs/SQiP1-B.pdf> （論文）
 - <http://www.juse.or.jp/software/444/attachs/SQiP1-B.pdf> （論文）
 - ◆ 「KWS振り返り」の説明、模擬体験を、民生機器、印刷、自動車部品などの複数の企業、シンポジウム、勉強会で実施

KWS振り返り：「KPT」と「なぜなぜ分析」を応用した振り返り

本日のご説明の機会を頂いた背景



引用 : <http://www.juse.or.jp/sqip-sympo/report/index.html>

SQIP2012での発表でもお世話になり、本当にありがとうございました。

本日のご説明内容と進め方

- はじめに
- ご説明
 - SQiP2012での私の発表体験
- Workshop
 - なぜなぜ分析（社外発表のススメ）
- まとめ

本日のご説明内容と進め方

■はじめに

ご説明

SQIP2012での私の発表体験

WorkShop

なぜなぜ分析（社外発表のススメ）

まとめ

本日の私の目的とゴール（目標）

■ 私の目的

- 私の体験のご紹介で、**発表をご検討中の方々のお役に立ちたい**
- 品質技術者のネットワークを広げたい

■ 私のゴール

- SQiP2013への**投稿宣言**を、**1名以上**の方から頂く
- 社外発表を**経験しなくちゃ** "**もったいない**" と思って頂く

社外発表は、プロアクティブな品質技術者への一歩です。

本日のご説明内容と進め方

はじめに

■ ご説明

- SQiP2012での私の発表体験

WorkShop

なぜなぜ分析（社外発表のススメ）

まとめ

SQiP2012での私の発表体験

■ 発表体験の内容

- SQiP2012の発表の背景、目的、ゴール
- SQiP2012の発表までの "道のり" と "壁" と "救いの手"
- SQiP2012の発表で作成したドキュメント

■ 発表体験の Before After

SQiP2012での私の発表体験

■ 発表体験の内容

- SQiP2012の発表の背景、目的、ゴール
- SQiP2012の発表までの "道のり" と "壁" と "救いの手"
- SQiP2012の発表で作成したドキュメント

■ 発表体験の Before After

社外発表の背景(課題)、目的、ゴール

- 社内の枠を超えて"**一步先**"の品質活動を学び、社内に還元する
 - 社内で実施中の**振り返り**活動の方向性を再確認し、質を向上させる
 - "**情報を出した人に、情報が一番集まってくる**"時代を確認する
 - 励まし競いあいながら向上できる**社外の仲間を見つける**

社外発表は、プロアクティブな品質技術者への一步です。

SQiP2012での発表までの道のり(全行程)



18ヶ月の道のりでした。直球ではなく変化球でした。

2008年に振り返り活動を開始

2008 5月~	2011 4月	10月	2012 4月	10月	2013 4月
<p>このまま同じように活動が続けて良いのか？</p> <p>社内活動(振り返り)</p> <p>現在の振り返りの仕組みを更に改良したい</p>					

細々とですが、着実に振り返り活動をしていました。

“一歩先”の品質活動を社内へ還元したらどうか

- そうだ、社外発表 行こう!!

しかし、最初に ……の壁がありました

2008 5月~	2011 4月	10月	2012 4月	10月	2013 4月
<p>このまま同じように活動を続けて良いのか?</p> <p>社内活動 (振り返り) 現在の振り返りの仕組みを更に改良したい</p> <p>...</p> <p>...</p> <p>SQIP 2011 ▼ 投稿 NG</p>					

まず、この ……の壁を超えることから始めました ...

予想外で、突然前が見えづらくなりました

- エッ、なんで…

実は、社外発表には多くの壁がありました

...

.....の壁

社外発表のレベルに
達しているかが分らない

発表内容の壁

発表先を決められない
知らない

発表先選定の壁

アブストラクトの
書き方が分らない

投稿の壁

社外発表レベルの
資料の作り方が分らない

資料の壁

伝えるプレゼンが
できるのか不安

プレゼンの壁

社外発表までの
進め方が分らない

進め方の壁

社外発表まで
モチベーションの
維持が難しい

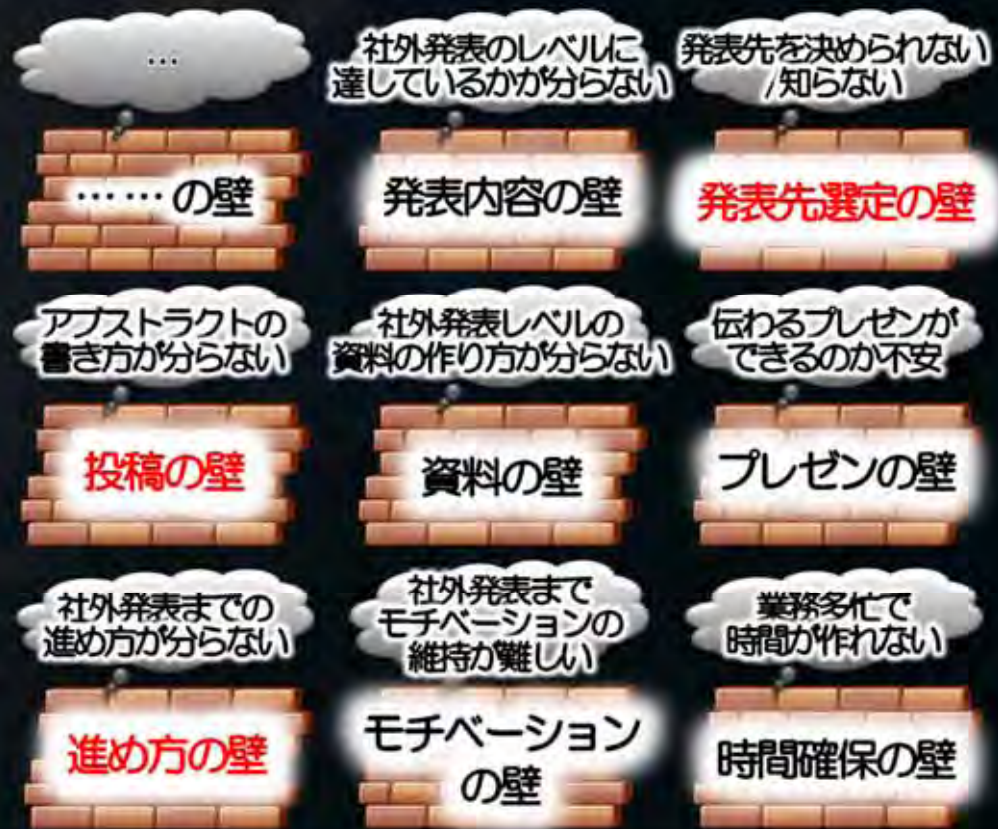
モチベーション
の壁

業務多忙で
時間が作れない

時間確保の壁

環境やスキルにより多さと高さは異なりますが、私には9つも壁がありました。

救いの手を差し伸べて頂きました。



人的ネットワークと人の温かさを、あらためて痛感いたしました。

救いの手に助けられながら壁を超えました

■ 理解者からのアドバイス



...

社外発表のレベルに達しているかが分からない

発表先を決められない / 知らない

社外発表までモチベーションの維持が難しい

社外発表までの進め方が分からない

人的ネットワークと人の温かさを、あらためて痛感した瞬間です。

救いの手に助けられながら壁を超えました

■ SQiP研究会での研鑽

- 社外メンバーとの研究活動
- 論文 (活動報告書) の作成
- 成果発表会でのプレゼン

■ SQiP研究会の後押し

- 積極的な投稿の打診

社外発表のレベルに達しているかが分からない

アブストラクトの書き方が分からない

社外発表レベルの資料の作り方が分からない

伝わるプレゼンができるのか不安

社外発表までモチベーションの維持が難しい

SQiP研究会で発表内容を練り直すことができました。

救いの手に助けられながら壁を超えました

■ 上司からの支援

- 配慮と後押し



業務多忙で
時間が作れない

SQiP研究会の活動結果を、高く評価して頂いた効果もありました。

少し、灯りが見えてきました

- やっぱり、SQiPシンポジウムで発表しよう！
- でも、まだ壁が…

救いの手に助けられながら壁を超えました

■ 日科技連 事務局のサポート

- 情報提供
- Q & A



社外発表のレベルに
達しているかが分からない

伝わるプレゼンが
できるのか不安

社外発表までの
進め方が分からない

頼りになる方々に感謝です。

ようやく、灯りが見えてきました

■ もう一息!!

社外発表の壁と救いの手

■ SQiP研究会の後押し

- 先輩の投稿アブストラクトを入手



アブストラクトの
書き方が分らない

発表経験者の投稿アブストラクトを参考にさせて頂きました。 本当に助かりました。

救いの手に助けられながら壁を超えました

■ 社内の仲間の支援

- レビューでダメ出し (6回以上)
- 夕練、夜練、時々 業務中練 ... (10回以上)

■ 日科技連 事務局のサポート

- リハーサル場所提供

社外発表レベルの
資料の作り方が分からない

伝わるプレゼンが
できるのか不安

社外発表まで
モチベーションの
維持が難しい

レビューと練習の日々が続きました。 一人の練習は、慣れれば恥ずかしくありません ...

プロアクティブな品質技術者へ

SQIP2012へGO!!

SQiP2012での私の発表体験

■ 発表体験の内容

- SQiP2012の発表の背景、目的、ゴール
- SQiP2012の発表までの "道のり" と "壁" と "救いの手"
- SQiP2012の発表で作成したドキュメント

■ 発表体験の Before After

投稿したアブストラクトの構成（全て）

1. ねらい

1.ねらい
論文で紹介する方法で、解決しようとする問題、あるいは論文で紹介する研究・開発の目標・目的について記してください。
本発表の内容は、2011年度 SQIP研究会 第1分科会「グループB」で優秀賞を受賞した研究(「KPT」と「なぜなぜ分析」)を応用したKWS振り返りの研究～実際の現場で検証したKWS 振り返りと、結果を横展開する仕組みの提案～の活動と成果および、その後の振り返り活動にも適用して得られた知見や事例である。
関係企業 6社の「実際の現場」や、SQIP研究会ミニシンポジウムなどの様々な研究活動を通じて調査、検証し、業種や職種を問わず「実際の現場で役に立つ」ことが証明できた「振り返り手法」、「振り返り結果を組織的に活用できる仕組み」、「KWS振り返りの効果」をご紹介する。
振り返りは、業種や職種、個人や組織を問わず、プロジェクト(以降、PJ)と略す)や支援などの活動を継続的に上手く回すために不可欠な活動である。しかし、「形式的」、「儀式的」に実施され、振り返り得られた知見が活用されず、立案した改善案なども実施されない、いわゆる「やりっ放し」の振り返りが多いことも周知の事実である。
これらの主な原因は、振り返りの「やり方」や「得られた結果」に『納得感』と『共感』が無く、立案した対策への『当事者意識』も低いためである。つまり、振り返りの「活動自身に課題がある」と言える。
本研究は、この課題を解決するために、業種、職種を問わず「現場で役に立つ」振り返り手法を確立し、得られた結果を組織的に継続して活用できる仕組みと共に提唱し、広く活用して頂くことが目的である。

2. 実施概要

2.実施概要
実施の目的、方法、実施した活動の概要、実施した結果について記してください。
1)「なぜなぜ分析」と「KPT」と「振り返り」の活用方法(「KWS振り返り」)を説明し、実際の現場で検証することで「現場で役に立つ」ことを確認した。「KWS振り返り」は、利用している言葉(「KPT」「Deep/Problem/Try」) + 「Why」「なぜなぜ分析」 + 「Solution」「対策」を用いた活動である。
多くの現場や業種で受け入れられるように、各手法は既存の手法を改良したものを使用し、特に、それらの改良した手法を組み合わせ、非営利の家庭協賛を推進させることで、必要な組織を先か後から構築することができた。
「KWS振り返り」は、目的別に3つのフレームワークがあり、そのうち、1)「振り返り」の枠組がある。
1)「振り返り」と「なぜなぜ分析」と「KWS振り返り」の「実施概要」を併せて、「実践フレームワーク」
→Face To Faceの話し合い、フラッシュカード、ワンハンドルールなどの仕組みにより、全員が「本音」のやり取りができる。→自分のKPT手法にマトリクス(軸)で表現できる仕組みを構築し、素直にやり取りしたKeep(良かった点)、Problem(改善点)、Try(試したいこと)など、単純な質問ではなく2次元に整理/整理することで、参加者の「思いの強さ」や「関心の高さ」などを表現できる。
→なぜなぜ分析にロジック・シンキングの要素(MEC)を追加することで、論理的な因果関係の分析ができることに加え、分析に用いる言葉についても「メタ/メタ/メタ」を必要とすることができた。
これに伴い、参加者によって納得の深い「真因」を特定できる。
→「KPT」と「なぜなぜ分析」を組み合わせ、これらを組み合わせた手法を用いることで、振り返りで残った課題を「直す」「改善/改善」ができ、解決できる可能性が高い「真因の立案」ができる。
2)「実践フレームワーク」の振り返り結果、特に「真因」(家内職と管理職)を共有することで、振り返りを通じて互いに課題の実践の目的と、実際の可能性を高める「コミュニケーションフレームワーク」
→「家内職」の振り返りの「本音」の結果を聞いて→「管理職」→「家内職」のコミュニケーション(両者の「アワードポイント」)ができる仕組みになっており、上記課題からの改善を引き出す。→「振り返り」で得られた知見やノウハウを、組織的に継続して活用する。「結果の無関係なフレームワーク」
→振り返りの当事者以外でも「必要な情報に上り易く見せたい」という共有の意欲や切り口を考えた。更に「内容を理解しやすい」ように図解の作成(行間の整理)の具体化や再考を止まらした。
→組織的な体制、向上のために「振り返りの活用」の仕組みを構築することになった。

3. 実施結果

3.実施結果
2)の実績に基づいて得られた結果について記してください。
「KWS振り返り」の実績により、以下のような効果(家内職、管理職)が実現できている。
●家内職
→「課題の明確化」「情報の共有方法の最適化方法」の改善など、振り返りで定めた課題の課題解決の効果が、実際に振り返り始めた。これにより、これまでに比べ課題解決への意欲も高まった。
→振り返りで得られた対策がノウハウを共有する活動が始まり、得意な人から教わることができるようになった。
→「なぜなぜ分析」だけでなく、振り返りの振り返り結果に具体的な改善案がわかるようになった。
→参加者は、参加者の振り返り結果を共有し、振り返りが「楽しい」と思ってくれるようになった。
→本音を伝えることができるようになり、家内職から管理職への報告・連絡・相談の頻度が上がった。
→「振り返り」の現場における参加者の満足度は振り返り前より、継続的に高まっていった。
●管理職
→家内職から定めた対策を実施するための議論の場をつくらせ、「同じ立ち上げ期」「同じ業種」「同じ業種」を明確にする。適切なタイミングで「振り返り」を実施するプロセスを定義する。
→参加者の振り返りの結果を、定期的な管理職と立会の管理計画の策定の参考にし、
→一部の改善のKPTと合わせて定期的な結果(資料)を共有した。
→振り返りの実施を継続的に進める管理職が増え、変更する経路も増えてきた。

4. 結論

4.結論
今回の活動の目的、今後の活動の方向性などを述べてください。
自分の手法の改善を促す「振り返り」、これらの本音を組み立てることで必要な結果を生かす目的を、実際の現場で検証することで、「現場で役に立つ」、「現場がわかる」振り返り手法の一つが育った。
「KWS振り返り」を繰り返すことで、振り返り活動に対する理解の期待が高まり、従来の振り返りであった振り返りであった対策への取り組みが実現されるようになった。特に、家内職と管理職とコミュニケーション(報告・連絡・相談とアワードポイント)を改善でき、関係の構築がよくなった。
本発表の「KWS振り返り」では、主に活動終了後の振り返りを実施したが、今後は、実践活動中の振り返りに対しての活用を促しながら、より参加者の高い関心を目指していきたい。

日科技連の申込みテンプレートに記入するだけで、論理性の高いアブストが完成できます。

投稿したアブストラクト(1/3)

■ 私の事例

1.ねらい

論文で紹介する方法で、解決しようとする問題、あるいは論文で紹介する研究・開発の目標・目的について記してください。

本発表の内容は、2011年度 SQiP研究会 第1分科会 グループB で優秀賞を受賞した研究(「KPT」と「なぜなぜ分析」を応用したKWS振り返りの研究 ~実際の現場で検証したKWS 振り返りと、結果を横展開する仕組みの提案~)の活動と成果および、その後の振り返り活動にも適用して得られた知見や事例である。

関係企業 6社の「実際の現場」や、SQiP研究会ミニシンポジウムなどの様々な研究活動を通じて調査、検証し、業種や職種を問わず「実際の現場で役に立つ」ことが証明できた「振り返り手法」、「振り返り結果を組織的に活用できる仕組み」、「KWS振り返りの効果」をご紹介します。

振り返りは、業種や職種、個人や組織を問わず、プロジェクト(以降、PJと略す)や支援などの活動を継続的に上手く回すために不可欠な活動である。しかし、「形式的」、「儀式的」に実施され、振り返りで得られた知恵が活用されず、立案した改善策なども実施されない、いわゆる「やりっ放し」の振り返りが多いことも周知の事実である。

これらの主な原因は、振り返りの『やり方』や『得られた結果』に『納得感』と『共感』が無く、立案した対策への『当事者意識』も低いためである。つまり、振り返りの「活動自身に課題がある」と言える。

本研究は、この課題を解決するために、業種、職種を問わず「現場で役に立つ」振り返り手法を確立し、得られた結果を組織的に継続して活用できる仕組みと共に提唱し、広く活用して頂くことが目的である。

パラグラフ・ライティングがお薦めです。 当時は知らず、段落で記載しています ...。

投稿したアブストラクト(2/3)

2.実施概要

実施方法について工夫した点がわかるように概説してください。

1で述べられた問題点を改善できることが分かるように記してください。

1で述べた課題を解決するために、「KPT」と「なぜなぜ分析」を応用した「KWS振り返り」を開発し、実際の現場で検証することで「現場で役に立つ」ことを確認した。「KWS振り返り」は、利用している各手法の頭文字([K]PT【Keep/Problem/Try】+[W]hy【なぜなぜ分析】+[S]olution【対策】)を用いた造語である。

多くの現場で受け入れ易くするため、各手法は既存の手法を改良したものを活用した。更に、それらの改良した各手法を組み合わせ、手法の実施結果を連携させることで、更なる効果を生み出すことができた。

「KWS振り返り」には、目的毎に3つのフレームワークがあり、その中には以下の特徴がある。

1) 納得感と共感を持てる振り返りの「やり方」と「実施結果」を得る 【議論のフレームワーク】

- Face To Faceの会議形式、ファシリテータ、グラウンドルールなどの仕掛けにより、全員が「本音」のすり合わせができる。
- 既存のKPT手法にマトリクス(2軸)で表現できる仕掛を追加し、各人から挙げられたKeep(良かった点)、Problem(改善点)、Try(試したいこと)を、単純な羅列ではなく2次元的に整理/整頓することで、参加者の「思いの強さ」や「関心度の高さ」などを表現できる。
- なぜなぜ分析にロジカル・シンキングの要素(MECE)を追加することで、論理性の高い因果関係の分析ができることに加え、分析に用いる要素についても「ヌケ/モレ/ダブリ」を少なくすることができる。
これに伴い、参加者にとって納得感の高い「真因」を特定できる。
- 「KPT」と「なぜなぜ分析」を各々改良し、これらを組み合わせた手法を用いることで、振り返りで挙げられた問題に対する「当事者意識」が高く、解決できる可能性も高い「対策の立案」ができる。

2) 「議論のフレームワーク」の振り返り結果を、異なる層(実務層と管理層)で共有することで、振り返りで挙げられた対策の実施内容の質と、実施の可能性を高める【コミュニケーションのフレームワーク】

- 「実務層」の振り返りの『本音の』結果を用いて「管理層」「実務層」のコミュニケーション(報告とフィードバック)ができる仕組みになっており、上位層からの支援を引き出しやすい。

3) 振り返りで得られた知恵やノウハウを、組織的に継続して活用する 【結果の横展開のフレームワーク】

- 振り返りの当事者以外でも「必要な情報にたどり着き易い」ように共有する情報の抽象度や切り口を考慮した。更に「内容を理解しやすい」ように情報の背景(行間の意味)の具体化や表現を工夫した。
- 情報鮮度の維持、向上のために「既存情報への追加」「いいね/ないねボタンの機能」の工夫がある。

文字が多過ぎですね。 図表があれば、より伝わり易いです。

投稿したアブストラクト(3/3)

3.実施結果

2の実施によって得られた効果について(できるかぎり具体的に)概説してください。

「KWS振り返り」の実施により、以下のような現場(実務層、管理層)の変化が確認できた。

実務層

- 「課題の棚卸の頻度」「情報の共有方法の見直し方法」の改善など、振り返りで挙げた現場の課題解決の対策が、実際に取り組み始めた。これにより、これまでに比べ課題解決への意識も高まった。
- 振り返りで得られた対策やノウハウを収集する活動が始まり、資産として共有され始めた。
- 「なぜなぜ分析しなくちゃね」など、振り返りの取り組みに前向きな言葉が交わされるようになった。
- 単なる反省会、悪者探しの振り返りが激減し、振り返りが「楽しい」と言ってくれる人が増えた。
- 本音を伝えたことがきっかけになり、実務層から管理層への報告・連絡・相談の頻度が増えた。
- 支援(サポート)組織における半期毎の事業計画の振り返りを、継続的に実施することが決まった。

管理層

- 実務層から挙げた対策を支援するための議論の場をつくった。(PJの立ち上げ時に「PJ体制」、「役割と責任」を明確にする、適切なタイミングで「設計仕様書」を入手するプロセスを定義する)
- 直前の振り返りのKPTの生の結果を、次のPJの課題管理計画とリスク管理計画の策定時の参考にした。
- 隣の部署のKPTとなぜなぜ分析の結果(資料)を共有した。
- 振り返りの実施を積極的に薦める管理層が増え、支援する経営層が増えてきた。

4.結論

問題解決の度合い、今後の展開への期待などを主張してください。

既存の手法の改善点を見つけて改良し、これらの手法を組み合わせることで更なる効果を生む仕組みを、実際の現場で検証することで、「現場で役立つ」、「現場が変わる」振り返り手法の一つの解が得られた。

「KWS振り返り」を繰り返すことで、振り返り活動に対する現場の期待が次第に高まり、従来はおざなりであった振り返りで挙げた対策への取り組みが実施されるようになってきた。更に、実務層と管理層とコミュニケーション(報告・連絡・相談とフィードバック)を改善でき、現場の風通しがよくなってきた。

本発表の「KWS振り返り」では、主に活動終了後の振り返りを対象にしたが、今後は、PJ活動実施中の振り返りに対しても範囲を広げながら、より即効性の高い仕組みにしていきたい。

実際どのような効果があったのかの記載は、特に重要です。

プレゼン資料の構成(抜粋)



25分間のプレゼンのストーリーです。

プレゼン資料とアブストラクトとの関係



プレゼン資料とアブストラクトの構成は同じ。プレゼンは「絵/図/口頭」、アブストラクトは「文章」。

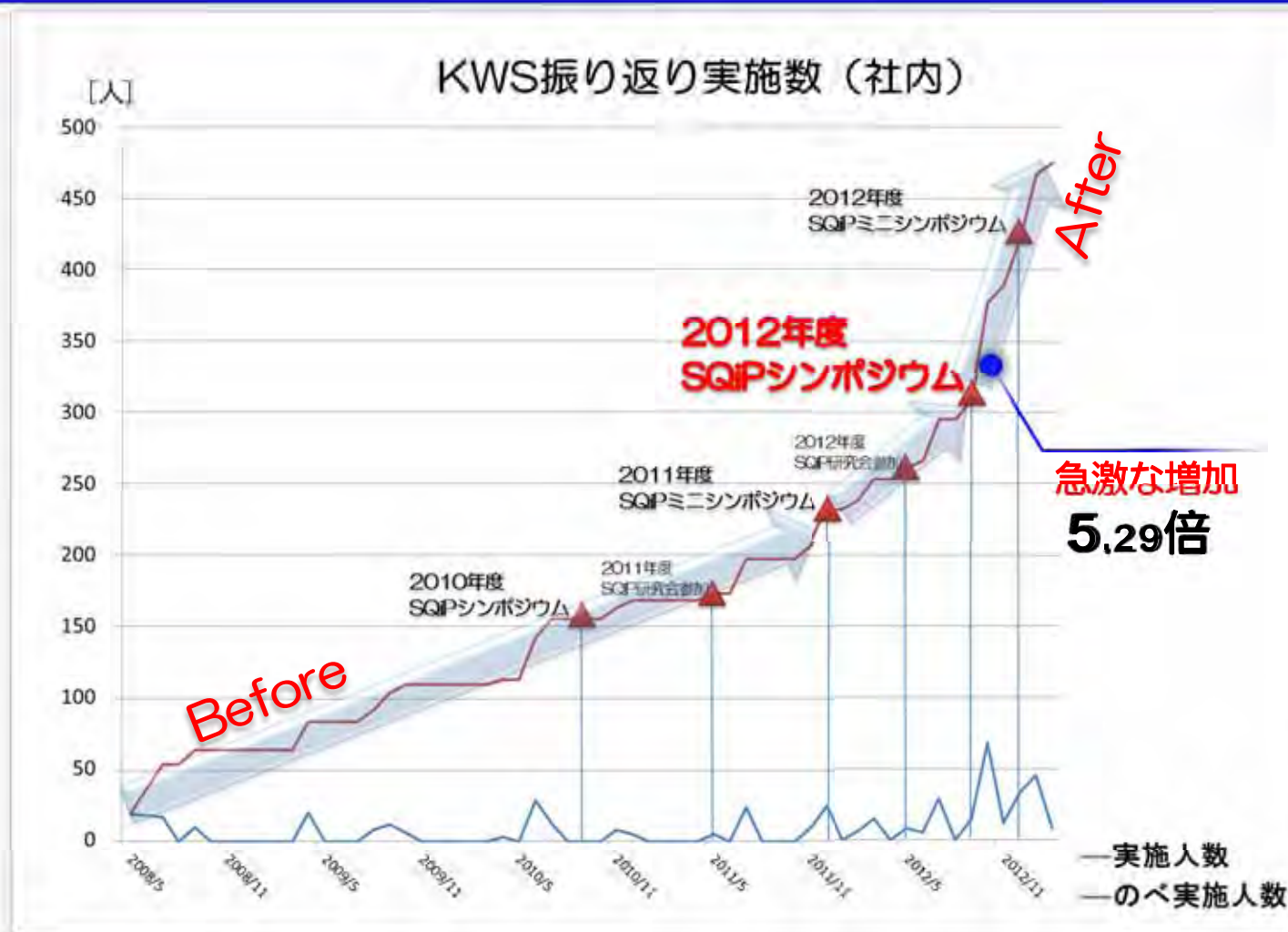
SQiP2012での私の発表体験

■ 発表体験の内容

- SQiP2012の発表の背景、目的、ゴール
- SQiP2012の発表までの "道のり" と "壁" と "救いの手"
- SQiP2012の発表で作成したドキュメント

■ 発表体験の Before After

発表体験の Before After



SQIP2012をきっかけに、急激に増えました。

発表体験の Before After



SQiP2012をきっかけに、劇的に増えました。

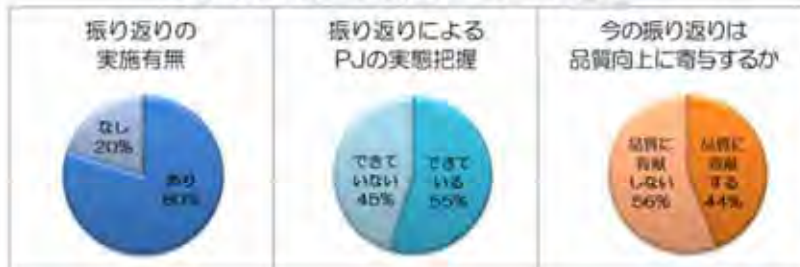
発表体験の Before After

■ 私のプレゼン資料の変化

Before

今までの振り返りの課題

ミニシンポジウムのアンケート結果



- 問題が再発しやすい : 問題の「真の原因」にすぎず(深ではない) (実行もされない)
- 「本音」が聞きにくい : アンケートへの回答が匿名、ヒアリングで聞き出した
- 準備の負担が大きい : 標準的なプロセス、テンプレートが無い
- 結果の再利用が難しい : 結果を自分のPJでも利用できるのかが分かりにくい

見出し リード

After

これまでの振り返りの問題点

実は、半数以上の人「振り返りは品質向上に貢献できていない」と思っていました。



SQP@2011ミニシンポジウムのアンケート結果より

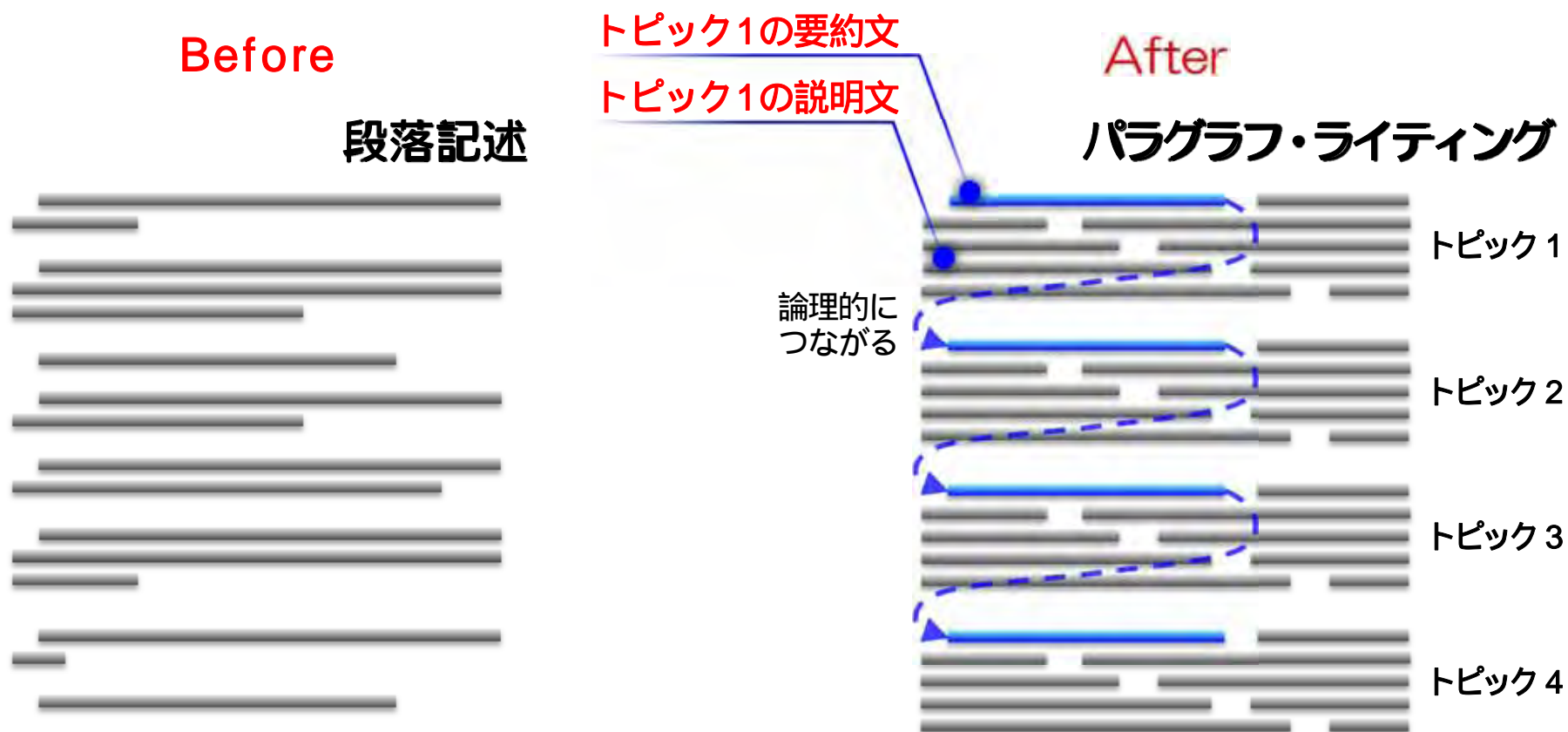
- ① アンケートへ無難な回答、ヒアリングで連発した発言になり、「本音」が聞きにくい。
- ② 問題の「真の原因」にたどり着いていないので、問題が再発しやすい。
- ③ 振り返りを「実施すること」が目的になっているため、**悔しさのある改善まで落とし込めていない**

メッセージ

緊張感の高いプレゼンに臨んだ成果です。見出し、リード、メッセージの基本構成です。

発表体験の Before After

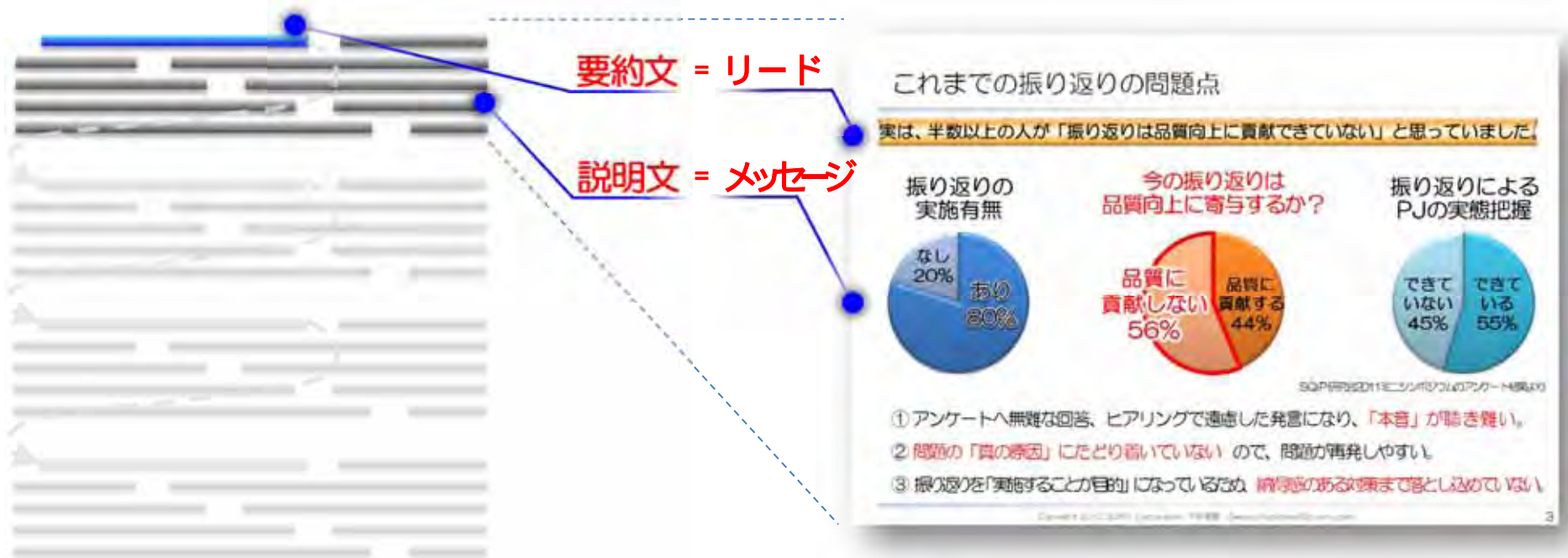
■ 私の文章作成の変化 (勉強中)



詳細は、「パラグラフ・ライティング」入門 (倉島保美 著, 講談社)

発表体験の Before After

■ プレゼン資料と作成した文章作成との関係



「論理的な文章」と「論理的なプレゼン資料」には相関があります。

本日のご説明内容と進め方

はじめに

ご説明

SQIP2012での私の発表体験

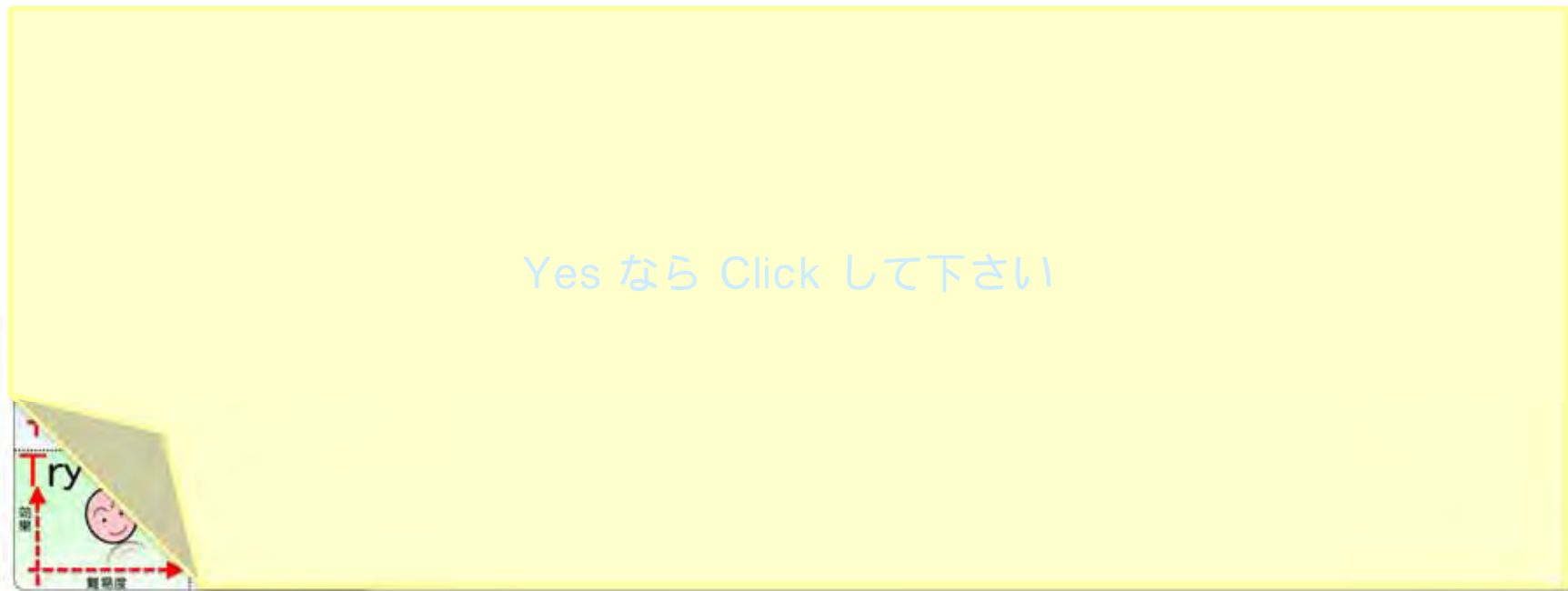
■ Workshop

- なぜなぜ分析（社外発表のススメ）

まとめ

WorkShop なぜなぜ分析(社外発表のススメ)

- 社外発表のはじめの一步を、みんなで考えてみませんか？
 - テーマ：なぜ社外発表に踏み出せない / 踏み出さないのか？



「当たり前なことを当たり前出来るようにするために工夫した内容」の発表なのに...

本日のご説明内容と進め方

はじめに

ご説明

SQIP2012での私の発表体験

WorkShop

なぜなぜ分析（社外発表のススメ）

■ **まとめ**

SQiP2012の発表後に起こったこと

- 発表内容に対して、社外から多くの情報が集まってきた
 - 改良策（RAカード、HAZOP、YWT）と実施結果
 - 実施した開発PJの声、改善のフィードバック
- 社外からの問い合わせ、支援要請を頂けるようになった
- 社内での活動が急加速でき、質も高くなった
 - 組織改善の仕組みの一つとして本格導入、リソース確保
 - 発表した仕組みを自分のPJで利用するためにカスタマイズ
 - 発表内容の質問や支援要望が増加

やっぱり、「情報を出した人に、情報が一番集まってくる時代」でした。

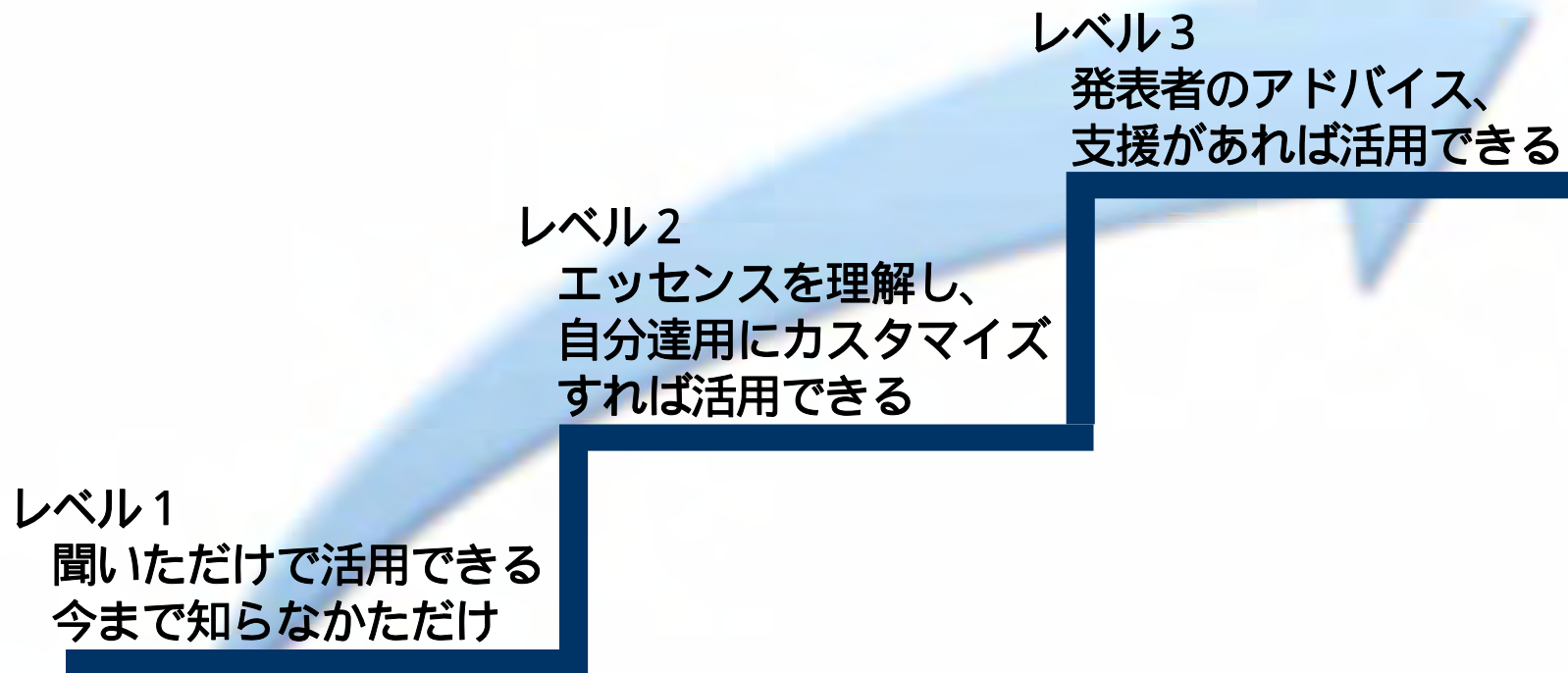
SQiP2012の発表後に起こったこと

- 品質技術者が社外発表する価値の理解が増えた
- 社外の師匠、先輩、仲間ができた
- 自己研鑽の時間を作り易くなった

これまで以上に、品質技術者としての仕事が、し易くなりました。

SQiP2012の発表後に分ったこと

■ 発表内容は、単純には真似できない



単純に真似できるレベル1の内容では、社外発表は難しいはず。

SQiP2012の発表後に分ったこと

- 発表内容の逆輸入も方法の一つ
 - 社外での成功事例は、社内に展開するための近道の一つ

これは、複数の有識者から頂いたアドバイスです。

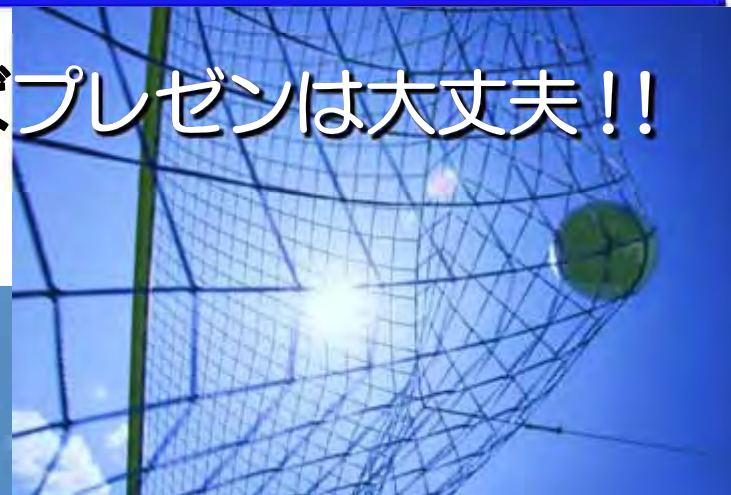
SQiP2012の発表後に分ったこと

- 品質技術者の育成の手段の一つになる
 - 緊張感の高い場所での発表は、とても効果的なトレーニング

プロアクティブな品質技術者へのトレーニングです。

SQiP2012の発表後に分ったこと

- 夢に出てくるくらい練習すればプレゼンは大丈夫!!



失敗すればやり直せばいい。
やり直してダメなら、もう一度工夫し、
もう一度やり直せばいい。

- 松下幸之助 -

緊張感の高いプレゼンは、成長につながります。

社外発表経験者からの声（私の周辺）

- **もう一度社外発表したい！！**（全員の回答）
- まずは、社外発表を経験して、**反応を楽しんでください**
- 日頃から考えを整理し、まとめる習慣がつくので、**社外発表はおススメです！！**

プロアクティブな品質技術者からの応援メッセージです。

質問

- SQiP2013に投稿する/させる!! と、宣言して頂ける方?
- 社外発表を経験しなくちゃ"もったいない!"と思って頂けた?

沢山の方に笑顔で手を挙げて頂けると嬉しいです。

さあ、次は あたなたの出番です !!





ご清聴ありがとうございました。

社外発表で、プロアクティブな品質技術者へ!!

Sessyu.Hanahara@jp.sony.com

Appendix

参考文献

- 花原雪州 他 著："「KPT」と「なぜなぜ分析」を応用したKWS振り返りの研究",
第27年度ソフトウェア品質管理研究会分科会報告書, 第1分科会, (財)日本科学技術連盟, 2012
 - <http://www.juse.or.jp/software/394/attachs/SQiP1-B.pdf> (成果報告書：論文)
 - <http://www.juse.or.jp/software/405/attachs/20120224-1-B.pdf> (成果発表会：プレゼン資料)
- 花原雪州 他 著："KWS 振り返りで得られた知識と知恵を、組織的に活用する仕組みの研究",
第28年度ソフトウェア品質管理研究会分科会報告書, 第1分科会, (一財)日本科学技術連盟, 2013
 - <http://www.juse.or.jp/software/444/attachs/SQiP1-B.pdf> (成果報告書：論文)
 - <http://www.juse.or.jp/software/446/attachs/20130215-1-B.pdf> (成果発表会：プレゼン資料)
- 花原雪州："「KPT」と「なぜなぜ分析」を応用したKWS振り返りの研究報告",
ソフトウェア品質シンポジウム2012, 2012
 - <http://www.juse.or.jp/sqip-sympo/program/pdf/B4-1.pdf> (プレゼン資料)
- 倉島保美："論理が伝わる 世界標準の「書く技術」 「パラグラフ・ライティング」入門,
講談社, 2012

特に、パラグラフ・ライティングは、おすすめです。

第27年度(2011)SQiP研究会の活動

第1分科会 グループB ソフトウェアプロセス評価・改善(27年度 2011年)

「KPT」と「なぜなぜ分析」を応用した KWS 振り返りの研究

～ 実際の現場で検証した KWS 振り返りと、結果を横展開する仕組みの提案 ～

Research of "KWS Retrospectives" by which improved "KPT" and "Whys analysis" were applied

Proposal of "KWS Retrospectives and using result in organization" method which verified on actual field

主査 阪本 太志 東芝デジタルメディアエンジニアリング(株)
副主査 三浦 邦彦 矢崎総業(株)
研究員 花原 雪州* ソニー(株) 伴野 孝 ベックマン・コールター(株)
鈴木 邦夫 (株)リンクレア 堤 秀二 (株)電通国際情報サービス
柴崎 勝文 パナソニック(株)

(* リーグ)

1. 研究概要

振り返りは、「開発業務や支援業務」など「個人や組織の活動」であるプロジェクト(以後PJと略す)を継続的に上手く回すために不可欠な活動である。活動を振り返って得た知識や知恵を、以降の活動の改善につなげるためである。昨今、振り返りの重要性の認知度は上がり、PJ完了後に実施されることも多くなった。しかし、「形式的」「儀式的」に実施され、立案した改善策の実施結果などが活用されない「やりっ放し」の振り返りが多いことも周知の事実である。

本研究は、振り返りの本来の目的を達成するための仕組みの提案である。仕組みには、3つのフレームワーク、2つの手法、およびそれらを活用するためのプロセスとテンプレートがある。この仕組みは、各研究員の社内の実際のPJとSQiPミニシナジウムで研究に興味を持って頂いた会社内でも実際に検証し、その結果を反映することで、実際に「使える」仕組みとなっている。本論文は、「これまでの振り返りの実施方法や結果に疑問を感じていた方」、「他に良い振り返り方法を探していた方」、「実施結果の横展開(以降の活動や他の活動で活用)を検討されていた方」には是非読んで頂きたい。付録のガイドライン(テンプレート)は、読者のPJにおける振り返りで活用頂きたい。



SQIP2012での発表 【セッションB4】 SQIP研究会

■ 「KPT」と「なぜなぜ分析」を応用したKWS 振り返りの研究報告

～実際の現場で検証したKWS 振り返りと、結果を横展開する仕組みの提案～

日科技連について 出版案内 所在地・連絡先 お客様相談コーナー
賛助会員 資格取得 輸付金制度 ENGLISH
関連団体リンク デミング賞 品質奨励賞 他 個人情報保護方針

Union of Japanese Scientists and Engineers

SQIP 2012
Software Quality Profession
ソフトウェア品質シンポジウム2012

開催概要 併設チュートリアル 本会議プログラム 講演・発表資料ダウンロード NEWS 開催実績

PMP®向けPDU供給対象®

ソフトウェア品質シンポジウム2012

2012 9.12 (水)
▶ 2012 9.14 (金)
東洋大学 白山キャンパス

※昨年同様、今年度も申請中

本シンポジウムは、ソフトウェア品質に関わる全ての方々が一箇に会し、現場で役立つ実践的な技術や経験、ノウハウ、研究成果を発表し、意見交換を行う場です。
開発者、マネージャー、ユーザ企業、QA担当者、研究者といった様々な立場、組織系やエンタープライズ系といった様々なドメインの方々がお互いの立場で品質向上のために真摯に議論し、相互研鑽や人的交流を行うことを目的としています。

SQIP ソフトウェア品質表社会
Software Quality Profession

2012年6月下旬より
お申し込み受付開始!

引用： <http://www.juse.or.jp/sqip-sympo/>

SQIP2012での発表(結果)セッションB4] SQIP研究会

[速報]SQIPシンポジウム2012 盛大に開催される！

2012年9月12日(水)～14日(金)(12日は併設チュートリアル)の会期で東洋大学・白山キャンパスにて「SQIPシンポジウム2012」が開催されました。

本シンポジウムは、日本におけるソフトウェア品質に関する最大級のイベントとして各方面から注目を集めています。

不透明感を増す経営環境下でありながら、今年は大幅に参加者が増加したことは特筆すべき事項であると言えます。招待者や登壇者を含めた総勢で520名、有料参加者は、併設チュートリアル約200名、本会議440名を超える方々が参加され、3日間で有料参加者だけでものべ1,000名を突破しました。

まずは、速報版として今回のシンポジウムの模様を写真中心にお知らせします。

今回のプログラムはこちら >> <http://www.juse.or.jp/sqip-sympo/program/index.html>

また、注目の表彰では以下の方が受賞されました。誠におめでとうございます。

■ SQIP Effective Award

「KPT」と「なぜなぜ分析」を応用したKWS振り返りの研究報告
～実際の現場で検証したKWS振り返りと、結果を横展開する仕組みの提案～
花原 雪州(ソニー(株))

■ SQIP Future Award

レビューオリエンテーションキットを用いた育成によるレビュー文化の醸成一心構え、文化、技術観点の伝授によるレビュー人口増加ー
川合 大之(株)日立ソリューションズ)

■ SQIP Review Committee Award(今年度新設)

派生開発における影響範囲抽出方法の提案 ～影響範囲の考慮漏れ防止を目指して～
矢野 恵生(株)デンソー)

引用 : <http://www.juse.or.jp/sqip-sympo/information/info003.html>

End